

あいづち行動における価値観の韓日比較

任 榮 哲*・李 先 敏**

キーワード： あいづちの頻度、あいづちのイメージ、先取りのイメージ

要 旨

本稿は、韓国人と日本人のあいづちの頻度、あいづちのイメージや先取りのイメージなどについて、聞き取り調査とアンケート調査を行い、その運用の実態を対照社会言語学的な観点から具体的に明らかにしたものである。ここで、今回の調査から明らかにし得たことを例示すると、次のようである。

まず、韓国人のあいづちの打ち方は日本人によく似ているが、その頻度においては日本人のほうが高い。また、韓日とも、くだけた話題のインフォーマルな場面では、そうでない場面に比べてあいづちの頻度が多くなる。

次に、あいづちを多く打つ人に対する評価では、韓国人はマイナス評価を、日本人はプラス評価を下している。逆に、あいづちを少なく打つ人に対して韓国人はプラス評価を、日本人はマイナス評価を下している。この点、韓国と日本とはまったく異なっている。

そして、注目しなければならないことは、韓国人は日本人より先取りや言いかえを多用するという点である。なお、先取りに関する違和感は日本人のほうが高いが、先取りの現われる確率は、日韓ともに、話し手と聞き手の間に情報が共有されている場合やくだけた話題のインフォーマルな場面で高くなる、という傾向がうかがえた。

1. はじめに

コミュニケーションにおいて、適切なあいづちは話し手の気分を良くし、話を滑らかに進める役目を果たすことから、談話(会話)におけるもっとも望ましい態度の一つであり、聞き上手の行動の大切な要素である。そして、このようなあいづちの働きやその研究の重要性が指摘されて久しい¹。

本稿は、韓国人と日本人は、どの程度の頻度であいづちを打つのか、また、あいづちや先取りについてのそれぞれの国におけるイメージは、どうであるのか、などについて、対照社会言語学

* YIM Young Cheoul: 中央大学校 (Chung-Ang University) 文科大学日語日文学科助教授。

** LEE Sun Min: 信一専門大学 (Shin-Il Christian College) 日語科専任講師。

¹ 畠 (1982), 水谷 (1984), 岡崎 (1987), 堀口 (1988) などで指摘されている。

的な立場から、その実態を明らかにすることを目的としている。なお、折りに触れ、中国の場合との比較も行う。

2. あいづちとは

分析に入る前に、「あいづち」ということばの語源について、少し触れておきたい。

『国語学大辞典』(1980)では、「あいづち」という語について、次のような説明がなされている。

「あいづち」は、刀剣を鍛える際のことばであって、師弟の意気が合わなければできないことである。……(中略)……古くは、「あどうつ」と言ったが、鍛冶などで、師匠の打つつちにあわせて弟子が入れるつちの比喩として生まれた「あいづち」ということばにとってかわられた。

一方、韓国語については、生越直樹(1988)に、次のような記述がある。

맞장구 *maččanġku* という語があり、この言葉は日本語の「あいづち」と同じような意味を持つ。맞장구 という語は、その語形からみて、元々「장구 *čanġku* (太鼓の一種)を二人で向かい合って打つこと」を指していたようである。しかし今日では、もっぱら日本語の「あいづち」と同じような意味で用いられている。맞장구 が元々 장구를打ち合うことを指したという点は、日本語の「あいづち」が元々槌を打ち合うという意味であったことと相通じるものがあり、大変興味深い。

さらに、맞장구 に動詞 치다 *čhita* (打つ、叩く)を付けて、맞장구 (를) 치다 *maččanġku (il) čhita* というと「あいづちを打つ」という意味になる。

このように、韓国語は日本語とよく似た面をもっている。

3. あいづちの頻度

あいづちはテレビ・ラジオでも観察され、電話での対応にもみられる。

さて、あいづちの頻度は媒体(対面行動か非対面行動か)や相手、場面によってどのように変化するか、その変化する要因を調べるために、それぞれ、別々の調査方法を用いてアプローチする。

3-1. テレビ・ラジオにおけるあいづちの頻度

韓日のテレビ・ラジオにおけるあいづちの頻度を比較するため、水谷信子(1984, 1988)の調査方法を援用して調査を行った。もちろん、韓日のテレビ・ラジオ番組の話題やその内容、出演者

の属性(年齢・性別・学歴・職業など)が違うので厳密な比較は難しいかも知れない。そこで、今回の調査では、比較の精度を高めるため、場面の設定などをなるべく水谷信子の調査方法と同様にして行った。

分析に用いた資料は延べ32分54秒間で、フォーマルな場面とインフォーマルな場面でのスクリプトにない話し合い四つを録画・録音、文字化して分析を行った。ちなみに、水谷信子は、延べ34分35秒間のテレビ・ラジオ番組三つを分析の対象としている。

今回、分析に用いた資料は、次のとおりである。

- ① テレビ番組「세상사는이야기 (世過ぎ話)」1992.12.26..... 8分30秒
- ② テレビ番組「만나고싶었습니다 (会いたかったです)」1992.12.27.....10分21秒
- ③ ラジオ番組「라디오전국연결 (ラジオ全国ネットワーク)」1993.4.7..... 6分54秒
- ④ ラジオ番組「건강365일 (健康365日)」1993.4.7..... 7分9秒

なお、四つの会話の主な話題や場面、被調査者の属性は表1の通りである。

まず、表2の1分当たりのあいづちの回数をみると、韓国人が約11回、日本人が約18回である。そして、あいづち間の音節数は、韓国人が約27音節、日本人が約23音節である。つまり、このことから分かることは、回数の面からみても、音節の面からみても日本人のほうが韓国人より比較的多くあいづちを打ちながら相手の話を聞いている、ということである。

次に、表3の韓国人のテレビ・ラジオにおけるあいづちの頻度をみると、話題や話し合いをリードする立場にある司会者(1分当たり約12回、約26音節)は、そうでない立場にある人(同様に約9回と約34音節)に比べてその回数が増える、ということがうかがえるが、この点は、水谷信子の調査結果と同様である。

また、場面による頻度の差をみると、くだけた話題のインフォーマルな場面(同様に約13回と

表1 話題・場面・被調査者の属性一覧

番組	話 題	場 面	属 性
①	独特な生き方	くだけた場面	3名(50代の男1名, 30代の男1名, 30代の女1名)
②	選挙と政治問題	改まった場面	2名(50代の男1名, 60代の男1名)
③	新開発品の紹介	くだけた場面	3名(男の司会者1名, 女の司会者1名, 男の教授1名)
④	健康(食困症)	くだけた場面	2名(男の司会者1名, 男の医者1名)

表2 テレビ・ラジオにおけるあいづちの頻度(国別)

	資料の持ち時間	あいづちの回数	1分当たりのあいづちの回数	1分当たりの平均音節数	あいづち間の音節数
筆者の韓国人調査	32分54秒	370	11.37	309	27.17
水谷の日本人調査	34分35秒	602	17.52	400	22.85

表 3 テレビ・ラジオにおけるあいづちの頻度(韓国)

		資料の持ち時間	あいづちの回数	1分当たりのあいづちの回数	1分当たりの平均音節数	あいづち間の音節数
役割	司会者以外	6分46秒	60	9.28	314	33.83
	司会者	26分08秒	310	11.88	304	25.58
場面	formal	10分21秒	76	7.44	293	39.38
	informal	22分33秒	294	13.16	325	24.69
性別	男	23分16秒	236	10.18	296	29.07
	女	9分38秒	134	14.28	322	22.54

約25音節)では、そうでない場面(同様に約7回と約39音節)に比べてあいづちの頻度が多くなる、という傾向も認められる。

さらに、男女別による頻度の差をみると、男性(同様に約10回と約29音節)より女性(同様に14回と約23音節)のほうにその頻度が高い、ということが分かる。これに関しては、日本人の大学生の男女差を調べた井出祥子(1979)にも同様の結果が出ている。

要するに、あいづちは相手の発言への支持を表わす表現である。女性の方があいづちを数多く打つ、ということは男性の方が会話をリードしていることを表わしているといえよう。

なお、これまでの研究の分析対象として取り上げられてきた言語的・非言語的あいづちの表現形式には、次のようなものがある。

- { 言語的あいづち……あいづち詞、繰り返し、言い換え、先取り
- { 非言語的あいづち……うなずき、笑い、スマイル、頭の横振り、驚きの表情など

ちなみに、水谷信子(1983)のテレビ・ラジオの調査結果によると、日本語の言語的あいづちの表現形式は44種類であったという。一方、今回の筆者の韓国語の調査では26種類であった。韓日ともに、上位2位までが全体の半分以上を占めているが、頻度の高い上位5位までの表現形式を挙げると表4のようになる。

表 4 テレビ・ラジオにおけるあいづちの表現形式(国別)

韓国(全体 370 回の内)		日本(全体 602 回の内)	
① ne	142 (38.4%)	ee	216 (35.9%)
② ye	56 (15.1%)	un	128 (21.3%)
③ ne-ne	32 (8.7%)	hai	50 (8.3%)
④ eu-heum	14 (3.8%)	naruhodo	33 (5.5%)
⑤ eum(eung)	12 (3.2%)	e	26 (4.3%)
以上で全体の 69.2%		以上で全体の 75.3%	

以下、今回採録された韓国のあいつち詞の表現形式は、次のようである。

韓国： eum ne, a ha, ye-ye, eo, geo-reo-jyo, ha-ha-ha, a, eo-heo, gue-reo-seub-ni-gga, ye-ye-ye, ne-ne-ne, a-ye-ye, a-ha-ye, a-geu-reo-se-yo, a-geu-reo-si-kun-yo, geo-rae-yo, a-ne-ne, eo-ne-ne, eum-ne-ne, 繰り返し, 言いかえ。

また、水谷 (1983) による日本語についての調査では、次のようなあいつち調の表現形式があげられている。

日本： ee-ee, un-un, ahaha, naruhodo-ne, haa, fun-fun, uun, haa-haa, nee, hai-hai, haaa, fuun, soo-desu-yone, aa, hoo-hoo, naruhodo-naruhodo, soo-desu-ka, soo-desu-ne, soo-nan-desu-yone, haa-ne, fun, ehe, ehehe, ho-ho, hoo, fuun naruhodo, hoo naruhodo, soo-deshoo-ka, soo-desu-yo, soo-de-gozaimasu-ne, soo, aa soo, aa soo-desu-ka, aa soo un, sorya soo, sore-wa ieru, yappari-ne.

3-2. 電話におけるあいつちの頻度

電話における韓日のあいつちの頻度を調べるため、劉建華 (1987) の「電話でのアイツチ頻度の中日比較」の調査方法²を援用して、韓国の大学生と会社員 20 名 (男性 10 名, 女性 10 名) を対象として、1993 年 4 月から 5 月にかけて調査を行った。

調査方法は、インフォーマントとの直接会話を録音 (1 名当たり約 1 分 20 秒), その反応を調査票の会話文に記入して分析を行った。なお、今回の調査に用いた会話文は、劉建華の調査票を韓国語に訳して用いた。なお、不自然なところは韓国人の言語状況に合わせて適当なことばに代えて調査を行った。

今回の調査に用いた会話文とその記号や数字などの見方を例示すると、表 5 のようである。

では、まず表 5 と劉建華の論文を参照しつつ、電話での 1 分当たりのあいつちの頻度を国別でみると、韓国人は 14.4 回、日本人は 17.5 回で日本人のほうがやや高い。ちなみに、中国人は 11.1 回で、韓国人がちょうど中間くらいである。

次に、日本人の場合、あいつちのルールの一つとして、文末であいつちを打つべきだとされているが、韓国人の場合でも日本人 (86.4%) ほどではないが、文末であいつちを打つ度合いはかなり高い (80.7%)。なお、劉建華によれば、中国人の場合は文末 (55.7%) ではもちろん、約 3 分の 2 の文末でもあいつちを打つ傾向がかなり高い、という。また、あいつちを打つ文末と打たない文末についても具体的に考察されているが、そこには必ずしも一定のルールは認められなかつ

² 劉建華 (1987) の調査でのインフォーマントは、近畿地域居住の大学生と会社員 20 名 (男 10 名, 女 10 名) と近畿地域在住の中国人留学生 15 名 (男 10 名, 女 5 名) で、それぞれ 1986 年 2 月から 7 月にかけて行われた。

表 5 調査用の会話文およびそれにおけるあいづちの頻度(韓国/日本)

(5/25)	(25/45)	(95/95)	(0/5)	(20/65)
実は、大変恐れ入りますが、ちょっとお願いしたいことがあります。△私は友達に頼まれて、彼の仕				
	(90/100)	(25/15)	(0/5)	(55/75)
事探しの手伝いをしているんです。△××さんのところに、もし関係のある情報がありましたら、こち				
	(15/5)	(100/80)	(10/15)	(75/65)
らに教えて戴きたいと思ひまして、電話を差し上げたわけです。△私の友達は××といます。△彼は				
(0/5)	(85/70)	(25/5)	(85/85)	(0/18)
日本の残留孤児です。△人柄がとてもよく、信頼できる人です。△彼は一年ほど前、中国瀋陽から日本				
	(85/95)	(5/5)	(70/85)	(10/15)
に帰ってきたんです。△今年は40歳で、男性です。△日本に帰る前には、ある機械の会社で、機械の設				
	(80/90)	(10/0)	(70/95)	
計の仕事をしていました。△いま、彼の日本語は、日常会話なら問題ないんです。△××さんのところ				
(15/0)	(25/25)	(0/5)	(0/5)	(45/75)
に、今後もし中国語と関係のある仕事、或いは私の友達ができそうなほかの仕事に関する情報があれば、				
(0/5)	(80/90)	(55/70)	(0/30)	
私のところに教えて戴けませんでしょうか。△アルバイトでもけっこうです。△但し、わざわざ時間を				
(10/20)	(90/75)	(10/0)	(70/95)	(0/25)
さいて、捜して戴かなくてもけっこうです。ついでの時でけっこうです。△誠に手数ですが、宜しくお				
願ひします。				

凡例) △: 調査者が話し中に、間を置く所、●: 被調査者があいづちを打った所、—: 韓国の状況に合わせてことばを代えた所³、(/): (韓国/日本人)のあいづちを打った人の%(なお、日本人の場合は劉(1987)の調査による)。

た、という⁴。

以上、電話におけるあいづちの頻度をみると、韓国人は日本人に比べてテレビ・ラジオの場合と同様、比較的少なく打つ傾向にあることがわかる。なお、電話で使われている韓国語のあいづち詞の使用順をみると、1位が「ye」(57.1%)、2位が「ne」(15.3%)、3位が「eum」(9.7%)となっていて、上位3位までが全体の82.3%を占めている。

以下、今回採録された電話での韓国語のあいづち詞の表現形式を示すと、次の通りである。

ye, ne, eum, eung, yeye, a ye, a, a geu-reo-seub-ni-gga, eo, a-ne, eum ne, ye gue-reo-seub-ni-gga, ye geu-reo-kun-yo, a geu-rae-yo

また、性別によるあいづち詞の使い分けをみると、男性は「ye」(69.9%)を多用する傾向にあるが、女性は「ye」(47.8%)に次いで「ne」(25.5%)もかなり混用されている、ということも分かった。

³ 今回の調査では、下線の部分を次のように言いかえた。

- 日本の残留孤児です → 韓国に一人て来てます。
- 中国瀋陽から日本に帰ってきたんです → 日本から韓国に帰ってきたんです。
- 日本(語) → 韓国(語)。
- 中国語 → 日本語。

⁴ 劉建華(1987)を参照されたい。

表 6 媒体による1分当たりのあいつちの頻度(国別)

媒体	韓国	日本
テレビ・ラジオ	11.4	17.4
電話	14.4	17.5

注) 日本の結果のうち、テレビ・ラジオは水谷(1983)、電話は劉(1987)による。

最後に、表6から、媒体の差によるあいつちの頻度をみると、韓国ではテレビ・ラジオより電話のほうがその割合が高いが、日本では媒体による差は認められない。

3-3. 相手と場面によるあいつちの頻度

あいつちの頻度は、話し相手と場面によって変化する。その変化に関与する要因を調べるため、幾つかの話し相手と場面を設定してアンケート調査を行った。

調査は、韓国と日本でそれぞれ1993年4月から6月にかけて、郵便郵送法による自己記入式を用いて行った。被調査者の属性は表7の通りである。なお、分析はすべてSPSS/PC+を用いて行った。

このアンケート調査では、韓国人と日本人の相手と場面によるあいつちの頻度はどのように変化するのか、それを調べるために、次のように尋ねてみた。

表 7 被調査者の属性一覧(国別)

全 体		韓国	日本
性	男性	140 (34.5)	55 (29.9)
	女性	265 (65.3)	129 (70.1)
	無回答	3 (0.2)	—
年齢	若年層	273 (66.9)	151 (82.1)
	中・壮年層	135 (33.1)	33 (17.9)
学歴	高学歴	263 (64.5)	106 (57.6)
	中学歴	138 (33.8)	76 (41.5)
	無回答	7 (1.7)	2 (0.6)
職業	学生	255 (62.5)	143 (77.7)
	その他	150 (36.8)	40 (21.7)
	無回答	3 (0.7)	1 (0.6)
地域	京畿道	112 (27.5)	岡山県 82 (44.6)
	慶尚道	151 (37.0)	奈良県 102 (55.4)
	全羅道	145 (35.5)	

Q: 対話の状況が、次のような場合、あなたのあいづちの頻度は、どうなると思いますか。それぞれ、一つずつ選んで下さい。

Q1: 目上の人と話をする時には(目下の人との場合には, Q2)

Q3: 話し相手が自分と親しければ親しいほど(親しくない人との場合には, Q4)

Q5: フォーマルな場面では(インフォーマルな場面では, Q6)

Q7: 話し相手が異性の人との場合には(同性の人との場合には, Q8)

Q9: 話し相手の話に自分自身が同意する時には(反対する時には, Q10)

A: ① 多くなる, ② やや多くなる, ③ 普通と同じぐらい, ④ やや少なくなる, ⑤ ほとんど打たない

では、表 8 から相手と場面によるあいづちの頻度の変化をみてみよう。

第一に、上下関係によるあいづちの頻度をみると、目上の人と話をする時は、韓国人の方はその頻度が少なくなるが、逆に、日本人の方は多くなる。しかし、目下の人と話をする時は、韓日ともに変化なしの回答が多かった。韓国人において目上の人と話をする時に頻度が少なくなるのは、目下は目上の人に対して口数を控えめにするという待遇的心理や伝統的な儒教文化の影響から目上の人への話は黙って聞くのが礼儀だという考え方の反映によるものかもしれない。注目に値する結果である。

第二に、親疎関係をみると、韓日ともに、話し相手が自分と親しければ親しいほどその数は多くなり、親しくない人との場合は、少なくなる傾向にある。そして、日本人は親しくない話し相手に対しても、韓国人よりあいづちを多く打つということがわかる。

表 8 社会言語学的要因によるあいづちの頻度(国別)

(単位: %)

		多くなる(①+②)		変化なし(③)		少なくなる(④+⑤)	
		韓国	日本	韓国	日本	韓国	日本
上下関係	目上の人に	18.2	●61.7	10.6	18.0	●71.2	20.2
	目下の人に	34.0	27.3	●42.2	●53.6	23.7	19.1
親疎関係	親しい	●75.9	●55.5	17.4	24.5	6.6	20.0
	親しくない	15.2	27.8	12.3	21.9	●72.5	●50.3
公私関係	フォーマルな場面	13.1	●42.4	17.9	24.5	●69.0	33.1
	インフォーマルな場面	●65.2	●42.0	29.2	34.4	5.6	23.5
性別関係	異性に対して	23.4	26.1	●39.2	●61.4	37.4	12.5
	同性に対して	33.2	26.8	●61.4	●68.3	5.4	4.9
意見の賛否	同意するとき	●76.5	●87.0	20.3	12.5	3.2	0.5
	反対するとき	21.6	14.7	10.8	7.6	●67.6	●77.7

注) ●印は最高値を示す。

第三に、公私関係をみると、フォーマルな場面では、韓国人はその頻度が少なくなるが、逆に、日本人は多くなる。しかし、インフォーマルな場面では、韓日ともに多くなる。とくに韓国人の割合は、目にみえて多くなり場面差が激しい、ということがうかがえる。つまり、このことは生越直樹(1988)の指摘通り、韓国人は、あいづちを打つべき場合と打つべきでない場合の差ははっきりしている、ということがいえるかもしれない⁵。

第四に、話し相手の性別による差をみると、異性に対して韓国人はやや少なくなるが、日本人はやや多くなる。そして、同性に対しては韓日ともにやや多くなる。

最後に、意見の賛否による差では、韓国人も日本人も話し相手の話に同意する時は多くなるが、反対する時は少なくなる傾向がある。

以上のことから、日本人は目上の人(日本 61.7%, 韓国 18.2%)とフォーマルな場面(日本 42.4%, 韓国 13.1%)であいづちが多くなる。これに対して、韓国人は日本人とは逆に少なくなる(目上の人に対して韓国 71.2%, 日本 20.2%, フォーマルな場面で韓国 69.0%, 日本 33.1%)傾向にあることがわかる。つまり、韓日の間では、話し相手が目上か目下かという「上下関係」と、フォーマルかインフォーマルかという「公私関係」があいづちの頻度の変化において正反対に作用しているのである。非常に興味深い結果である。

今回の調査は意識調査で実態調査ではない。実態調査を行うことによって、今回の結果を検証する必要がある。

4. あいづちのイメージ

あいづちの多少によって韓国人と日本人は、相手をどのように評価するのか。それを調べるためになるべく対義語となる評定語をペアにして、次のように尋ねてみた。

調査は、3-3. に示したアンケートと同じ方法で同時に行った。

Q: あいづちを多く打つ(ほとんど打たない)人に対して、どのように評価しますか。

次の中から5つ選んで下さい。

- | | |
|-----------------|----------------|
| A: ① 重みがある人のようだ | ② 軽く見える |
| ③ 積極的な人のようだ | ④ 消極的な人のようだ |
| ⑤ 丁寧な人のようだ | ⑥ おべっかを使うようだ |
| ⑦ 黙りがちな人のようだ | ⑧ おしゃべりな人のようだ |
| ⑨ 遠慮深い人のようだ | ⑩ ぶしつけな人のようだ |
| ⑪ 主体性があるように見える | ⑫ 主体性がないように見える |

⁵ 生越直樹(1988)を参照されたい。

- | | |
|--------------|---------------|
| ⑬ 気性が活発のようだ | ⑭ うすっぺらな人のようだ |
| ⑮ 愛想のよい人のようだ | ⑯ 愛想のない人のようだ |
| ⑰ 上品な人のようだ | ⑲ 下品な人のようだ |
| ⑱ 男(女)らしく見える | ⑳ 大人気ない |
| ㉑ 優しい人のようだ | ㉒ 無口な人のようだ |

まず、あいづちを多く打つ人に対するイメージをみてみよう。

韓国人は気性が活発な人のようだ (12.8%), 愛想のよい人のようだ (11.7%), おしゃべりな人のようだ (10.9%), 軽く見える (10.7%), 積極的な人のようだ (9.9%) の順である。ところが、日本人は愛想のよい人のようだ (14.7%), 優しい人のようだ (11.6%), 丁寧な人のようだ (8.5%), 積極的な人のようだ (8.0%), 軽く見える (7.2%) の順であり、それぞれ、評価がやや分かれていることが認められる。とくに、韓日の間で差があるカテゴリーは、気性が活発のようだ (韓国 12.8%, 日本 6.3%), 丁寧な人のようだ (韓国 2.4%, 日本 8.5%), 下品な人のようだ (韓国 5.6%, 日本 1.1%) の順である。つまり、このような結果から推定できるのは、あいづちを多く打つ人に対して日本人のほうが韓国人よりやや肯定的な評価をしている、ということである。

次に、あいづちをほとんど打たない人に対するイメージをみると、韓国人は無口な人のようだ (16.1%), 遠慮深い人のようだ (15.5%), 消極的な人のようだ (13.9%), 愛想のない人のようだ (12.5%), 黙りがちな人のようだ (12.4%) と評価している。ところが、日本人は愛想のない人のようだ (15.0%), 無口な人のようだ (14.3%), 黙りがちな人のようだ (13.3%), 消極的な人のようだ (12.2%), 重みがある人のようだ (6.0%) と評価している。また、前項同様、韓日の間で差があるカテゴリーは、遠慮深い人のようだ (韓国 15.5%, 日本 4.3%), 主体性がないようだ (韓国 0.6%, 日本 4.9%), ぶしつけな人のようだ (韓国 2.0%, 日本 5.8%) の順である。つまり、このことは、あいづちを少なく打つ人に対して韓国人のほうが日本人よりやや肯定的な評価をしている、ということである。

以上、あいづちの多少による評価をみると、韓国人は日本人よりあいづちを多く打つ人に対してはマイナス評価を、あいづちをほとんど打たない人に対しては、逆にプラス評価をする、ということがうかがえる。これは、それぞれの民族文化によるあいづちの価値観の違いが反映され、このような結果になったと思われる。

5. 先取りのイメージ

韓国人と日本人の先取りに関するイメージは、どうであるのか、それを調べるために、次のように尋ねてみた。

この項目の調査も前述の 3-3. に示したアンケートと同じ方法で、同時に行った。

Q: あなたは、次のような時、つまり自分(例の対話中の「甲」の場合)が言い終わらないうちに、聞き手(例の対話中の「乙」の場合)に先を予測して言われると、どう思われますか。いくつかでも自由に選んで○印をつけて下さい。

《例》 甲：雨が多いとか地震が多いとか、そういう自然環境の影響が……

乙：強いということですね

甲：うん

A: ① 話の進行を助けてくれて気が楽だ, ② 興味や関心を示す表現であって気分がよい, ③ 話がおもしろくなって愉快だ, ④ どちらともいえない, ⑤ 自分より目下がそうしてしまうと、ぶしつけな態度に思われる, ⑥ せかされているようであまり気分がよいくない, ⑦ 違和感がある

国別による先取りに対するイメージの結果を図1からみてみよう。

日本人の場合は、せかされているようであまり気分がよいくない(44.6%), 自分より目下がそうしてしまうと、ぶしつけな態度に思われる(39.1%), 違和感がある(25.5%)という順である。一方、韓国人の場合は、自分より目下がそうしてしまうと、ぶしつけな態度に思われる(57.8%), せかされているようであまり気分がよいくない(50.2%), 興味や関心を示す表現であって気分がよい(36.3%)となっている。とくに、自分より目下がそうしてしまうと、ぶしつけな態度に思われる、という答えは、韓国人ではもっと高い。また、先取りに違和感があると答えた割合は、韓国人より日本人のほうが高かった。韓国人には目上の人と話をする時、あいづちを普通より少なくするばかりでなく、先取りもしないほうがよいという考え方がある。上の結果はこのような考え方が反映されたものであろう。なお、今回のテレビ・ラジオ調査で、先取りが現われる確率は、韓日ともに話し手と聞き手の間に知識や経験が共有されている場合と、くだけた話題のインフォーマルな場面で、顕著に高くなる傾向がみられた。また、韓国人は先取り(あいづち総数のうち、韓国2.2%, 日本0.8%)や言いかえ(あいづち総数のうち、韓国5.7%, 日本1.0%)を日本人より

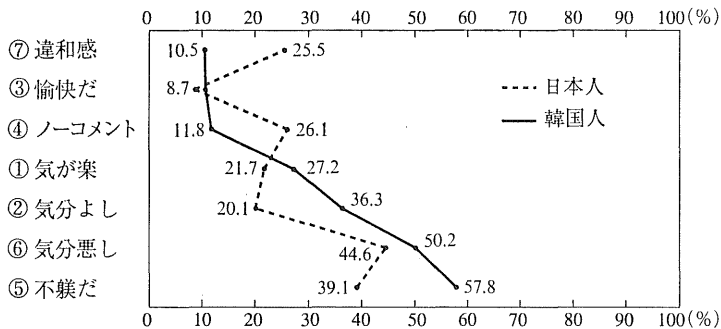


図1 先取りのイメージ(国別)

多用することもわかった。一般に、韓国人は日本人に比べて対話において積極的であるとよくいわれるが、この結果は、そのようなことを示す一つの好例であるといえるかも知れない。これらの点については、今後さらなる検討が必要であると思われる。

6. おわりに

今回の調査から知り得たことをまとめると、次のようになる。

- ① 韓国人より日本人のほうがより多くあいづちを打つ。
- ② 韓国人のあいづちの打ち方は日本人によく似ている。
- ③ 韓日の間では、話し相手の上下関係と公私関係があいづちの頻度の変化において正反対に作用している。
- ④ あいづちを多く打つ人に対して韓国人はマイナス評価、日本人はプラス評価する。
- ⑤ あいづちを少なく打つ人に対して韓国人はプラス評価、日本人はマイナス評価する。
- ⑥ 先取りに違和感があるという割合は韓国人より日本人のほうが高い。
- ⑦ 韓国人は先取りや言いかえを日本人より多用する。
- ⑧ 先取りの現われる確率は、韓日とも、話し手と聞き手の間に情報が共有されている場合、くだけた話題のインフォーマルな場面で、高くなる。

以上、韓国人と日本人のあいづちの頻度や先取りの運用の実態とその評価意識などについて、いろいろな観点からの実態調査を行い、多少なりとも興味深い結果が得られたと思う。しかし、コミュニケーションにおける聞き手の言語行動の運用の実態を対象とした対照社会言語学的な立場からの研究は、いまだ未開拓の部分が多い。このような分野での研究によって得られる成果は、お互いの誤解やディスコミュニケーションを防ぎ、民族同士の理解増進をさらに深めるために役立つものであろう。

参 考 文 献

- 井出祥子 (1979) 「大学生の話しことばに見られる男女差異」, 文部省科研費特定研究『言語』ベンク班中間報告.
- 岡崎敏雄 (1987) 「談話の指導——初～中級を中心に」, 『日本語教育』62号, 日本語教育学会.
- 生越直樹 (1988) 「朝鮮語のあいづち——韓国人学生のレポートより」, 『日本語学』7-13, 明治書院.
- 黒崎良昭 (1987) 「談話進行上の相づちの運用と機能——兵庫県滝野方言について」, 『国語学』150集, 国語学会.
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』, 東京堂出版.
- 杉戸清樹 (1989) 「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち」, 『日本語教育』67号, 日本語教育学会.
- 泉子・K・メイナード (1987) 「日米会話におけるあいづち表現」, 『言語』16-12, 大修館書店.
- (1993) 『会話分析』, くろしお出版.

- 畠 広巳 (1982) 「コミュニケーションのための日本語教育」, 『言語』 11-13, 大修館書店.
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手による予測の型」, 『文芸言語研究・言語編』 17, 筑波大学文芸・言語学系.
- (1991) 「あいづち研究の現段階と課題」, 『日本語学』 10-10, 明治書院.
- 松田陽子 (1988) 「対話の日本語教育——あいづちに関連して」, 『日本語学』 7-13, 明治書院.
- 水谷信子 (1983) 「あいづちと応答」, 『話しことばの表現』, 筑摩書房.
- (1984) 「日本語教育と話しことばの実態——あいづちの分析」, 『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二卷言語学編』, 三省堂.
- (1988a) 「話しことばの比較対照」, 『話しことばのコミュニケーション』, 凡人社.
- (1988b) 「あいづち論」, 『日本語学』 7-13, 明治書院.
- (1993) 「『共話』から『対話』へ」, 『日本語学』 12-4, 明治書院.
- 劉 建 華 (1987) 「電話でのアイズチ頻度の中日比較」, 『言語』 16-12, 大修館書店.